

## 女子大学生の学習習慣・学習態度 に関する研究 (その1)

宮本 邦雄

### 1. 大学教育の問題状況

最近の学生は、勉学をはじめとして、全ての面で意欲に欠けているという声をよく耳にする。また、三無主義ないし四無主義学生(無気力・無関心・無感動・無責任)とされているように、意欲の減退した学生が多いのではないかと思われる。それが表に現れるのは、長期欠席や試験への欠席、単位未修得、あるいは留年や休・退学であろう。

留年の増加は70年代後半からみられ、主要4年制大学の4人に1人が留年している。特に大規模大学に多く、なかでも理工系学部の留年が顕著であり、女子大学や小規模大学には少ないと報告されていた(土川・丸井、1978)。また、松原(1979、1980)によると、留年の原因としては「クラブ・サークル活動に時間をかけ過ぎた、大学院受験や就職できなかったため、勉学の意欲をなくした」などが上位を占める。さらに生活への不満・悩みを調査したところ、「講義の内容や方法、相談できる教官がない、カリキュラムが希望と合わない、ものを考える余裕がない、自分の大学についての知識が不足、生活が充実していない、不本意な入学、大学生活へのオリエンテーション不足」などが、各大学共通にみられ、留年・怠学の遠因となっていることが示唆された。

一方、病理的な無気力状態として大学生に

散見されるステューデント・アパシーに初めて言及したのはウォルターズ(1975/1961)であった。彼はこれを「成熟した男らしさとか、効果的な男らしさを形成するという青年中期や青年後期の心理的作業において、敗北が予期される場面でなされる反応」と考えたが、わが国においても、近年取り上げられるようになった。

ステューデント・アパシーは青年後期の発達課題としての自己アイデンティティの模索状態を反映する現象でもあるが、笠原(1981、1986)は、アパシーの本体として、自分の自尊感情に密接に関わりがあると当人が感じる特定の競争場面からは逃避しようとする「選択的退却」という心性を指摘している。そして、これらの学生達は、一見ぐうたらに見える生活態度とは逆に、性格は極めてきちょうめんでまじめ、しかも完全主義者でさえあるが、それと同時に、過去において卓越した両親や同胞との葛藤を経験しており、優勝劣敗に敏感すぎる面がみられるとしている。

また安藤(1989)は、ステューデント・アパシーと診断される学生たちは、多くの場合、勉学に対する意欲減退やそれにとまなう学業成績の不振について、自ら深刻に悩むことをしないと指摘した。その原因はパーソナリティに深く根ざすものであるから、一時的な対処療法ではなく、自己の特異な性格や硬直した価値観への「気づき」、そういう自分にとって「無気力」や「努力の中断」がどんな意味

をもっているかなどについて洞察を促す気長な治療が必要であるとしている。

以上のような不適応、あるいは病的状態にまでは至らないにしても、大学教育の現場においては、多くの問題状況が見受けられる。例えば、授業中の私語の問題である。

島田(1989)の女子大学学生641名を対象とした私語に関する調査によると、教師の問題として、授業内容(66%)、集団過程(34%)、教授技術(28%)、学生の受講動機(16%)があげられた。学生本人が私語をする場合には、受講動機(50%)と授業内容(44%)に集中した。また、私語をしている自覚があり、はた目を気にし、教師に申し訳ないと感じている学生も多い。周囲が私語をしている場合には、何らかの形で不快を表している学生は八割を越える(89%)が、慣れてしまった・あきらめるといふものもみられた(21%)。授業中の私語は特定の条件のもとでのみ生起するものではなく、教師による適切な対処が必要といえよう。

こうした授業中の私語の問題は、高等教育機関に進学するものは学習意欲があり、学業に専念するものだという暗黙の了解を疑問視させるに十分であろう。

## 2. 大学教育における教授＝学習過程と進学動機

以上のような大学教育における問題状況の原因として、どのようなものが考えられるであろうか。教授＝学習過程の構成要因としては、教授者要因、学習者要因、学習内容要因、環境要因に大きく分類されよう。まず教授者要因として、講義内容、教授方法、集団過程、教授者の魅力が考えられる。また、学習者要因としては、学力、スタディスキル、社会的スキル、動機づけ、自己調節能力、教授者との近接性などの学習習慣・学習態度が考えられる。また、学習内容要因としては、内容、レベル、構造化の程度、媒体などが考えられよう。さらに環境要因として、大学の施設や

図書、社会的サポートなど、さらに各個人により異なる、アルバイト、サークル、友人・家族などの社会的条件、経済状態や通学時間などの諸条件をあげることができよう。

本研究においては、以上の諸要因のうち学習者の要因に焦点をあてていきたい。まず、大学教育においては、レディネスとしての学力は一応満たされていると考えられるが、受験勉強では身につけにくい、自己調節学習の能力や学習の仕方すなわちスタディスキルについては個人差が大きいと報告されている(林、1982)。さらに、学習動機の側面であるが、大学進学のための目的、動機は、近年きわめて多様化してきたことが指摘されよう。

筆者は、先の報告において(宮本、1992)、女子大学学生を対象とした進学志望動機調査の因子分析を行い、次のような5因子を見いだした。第1因子は、大学の専門教育への欲求を示した「専門教育志向型」であり、第2因子は、「開放感を味わいたい」という享楽指向、「周りの人が進学するので」といった追従型反応であり、「享楽・追従型」であった。また第3因子は、自己実現の場を積極的に模索しようとする「積極的なモラトリアム志向型」であり、第4因子は、自分自身の欲求に基づくものでなく、家族の意見を重視しようとする「家族尊重型」である。最後の第5因子は、学業以外の積極的活動を回避していかうとする「消極的無為型」で、学業以外の「副業軽視型」とでもいえるものであった。

この結果は、淵上(1984)が、高校生を対象とした調査を基に見いだした、大学の本来の機能、家族への配慮と規範機能、モラトリアム機能、大学の副次的機能、大学の経済価値機能といった因子とほぼ対応しているといえる。

では、こうした多様な進学動機をもつ新入学生は、大学教育や大学生活にどのように適応していくのであろうか。入学後3カ月を経た一年生に対し、大学生活についての自由記述式による調査を行ったところ、多くの学生が、学業や大学での生活への不満や挫折、さ

らにそれを克服した体験を述べた(宮本、1992)。すなわち、大学入学直後の数カ月間の学業への適応が、それ以降の大学生活への適応に大きく影響していると思われる。この時期に、大学教育において有効な、学習方法、学習習慣・学習態度を身につけていない場合には、長期欠席、単位未修得ひいては休・退学へと追い込まれるのではないだろうか。

この問題についての研究は、最近途についたばかりであり(社会的サポートとの関連、飯島・伊藤・川口、1992)、その結果には興味をもたれるところである。次に、これまで比較的研究の蓄積されてきた、学習習慣・学習態度についての研究を概観していきたい。

### 3. 大学生における学習習慣・学習態度の研究

本研究においては、極めてあいまいではあるが、先述したようなスタディスキル、学習動機などのいくつかの学習者要因を含む概念として学習習慣・学習態度を用いていきたい。

大学生を対象とした意欲減退学生についての最初の調査研究は、昭和47年に広島大学教養課程の学生847名を対象として行われている(上地、1979)。主体的要因(46項目)、大学環境要因(12項目)、社会的環境要因(17項目)からなる意欲減退診断検査を用いた実態調査の結果、当時の学生像として次のような特徴が示された。「日常生活を楽しく過ごしているわけでもなく、毎朝ぼやっとして頭がすっきりせず、幸福感がない。自信に欠け、体調も良いとはいえず、自ら積極的に行動しようとはせず自閉的傾向が強い。自分自身の姿がつかめず、自分が何を望んで生きているのか不明確なため迷っている。多くの学生が理想と現実のギャップを痛切に感じ、人間は孤独な存在であるとしている。」この孤独への欲求が、閉鎖的、排他的、独善的、自己縮小的な傾向をとる場合は意欲の減退、不適応をもたらすとしている。

さらに、大学環境要因に関しては、過半数

の学生が不満を抱いており、授業内容や教官とのコミュニケーションにも満足していない。また、社会的環境については、政治の状況、社会情勢に対しての不満も非常に強いことがみとめられた。また学生が主観的に判断した意欲度とサークルへの参加状況も調査しており、意欲減退学生はおよそ3分の1を占め、半数の学生がサークルへ加入し、その半数(4分の1)が積極的に活動している(上地、1979)。

80年代には、因子分析の手法を用い、スタディスキルや学習動機を中心とした学習習慣・学習態度を取り上げた、林らの一連の研究(林、1981、1982a、b、1983;林・滝本、1981)、教育学の立場からの坂元(1988)などの研究が報告されている。

林・滝本(1981)は、大学生の学習習慣・学習態度の構造を明らかにすること、学習習慣・学習態度と性格傾向との関係を明らかにすることを目的として、男子学生269名、女子学生404名を対象に質問紙調査を実施した。質問項目は Wrenn, C. G. と Brown, W. F., & Holtzman, W.H. を基に作成された学習習慣、学習態度についての69項目で、5段階評定による回答を求めた。

因子分析の結果、男子で、学習興味と学習姿勢の因子、学習方法の因子、学習に対する計画性の因子、情緒性の因子、学習の手際よさの因子が見いだされ、女子では第3因子で男子と異なり、学習意欲の因子が見いだされた。また、各項目について性差を検討してみると、男子は女子に比べて、学習習慣や学習態度に消極的傾向がみられた。さらに、モーゼレイ性格検査により外向傾向、神経症傾向について学生を分類し、学習習慣・学習態度を比較したところ、内向傾向の者に比べて、外向傾向の者の方が学習活動や学習環境に対して積極的接近がみられ、社会的技能の関与が示唆された。また神経症傾向の強い者は、弱い者に比べ、学習に対する積極的取り組みが抑制されていると考えられた。

さらに林(1982)は、Brown(1965)のス

タディスキルス質問紙（学習場面、学習方法、学習モチベーションを下位領域とする）を用いて、大学生（男子210名、女子272名）を対象に調査を行い、3つの下位領域について因子分析を行った。その結果、学習場面については、勉強の遅れの因子、部屋への外的影響の因子、注意拡散の因子、気の散る因子、学習回避の因子が見いだされ、学習の方法として、要点把握困難の因子、粗雑さに関する因子、集中不十分の因子、検討不足の因子が見いだされた。さらに学習モチベーションについては、興味の喪失の因子、努力をしない因子、先生への批判の因子、勉強はむだだと感じる因子、勉強に張り合いを感じない因子、先生と接触をしない因子が見いだされた。さらに、こうした学習技術は、半年間の時間経過による変化はみられなかった。また、林（1981）と同様、MPIの神経症傾向との関連がみとめられた。

一方、坂元（1988）は、学習技能を学生の身につけさせることによって、学力、創造性、学習意欲を間接的にのばすという具体的方法の開発をめざしている。彼は、学習技能調査表、学習意欲調査表、創造性調査表（各30項目）を用い、理科系学生131名、文科系学生115名に対し調査を行った。また学力の測度として、理系学生では学業成績を、文系学生では語彙テストを用いた。

まず学習技能の構造を検討するため、学習技能調査表を因子分析したところ、認知因子（要点をおさえながら聞いているなど）、作業因子（重要と考える部分に線を引いたりして、書いているなど）、視覚因子（図や表にしながら調べているなど）の3因子が見いだされた。また、学習意欲の構造については、学習意欲調査表の因子分析の結果、認識への追求因子（複雑な問題でもあきらめずに他面的に考えているなど）、社会的積極性の因子（グループ活動を率先してやるなど）、自己管理の因子（学期などの初めには、生活や勉強の計画表を作るなど）の3因子が見いだされた。さらに、学力と学習意欲、学習意欲と学習技能の関係

を検討し、その結果を基に、コンピュータ処理により個人別に診断や処方呈示し、実験的に学生自身の対処を求めている。

さらに授業評価の研究もいくつか報告されているが、最近、八並（1989）は、国公立大学、短大の学生（一般教育938名、専門教育975名）を対象に、一般教育のよい授業と専門教育のよい授業についての調査を行った。

授業評価項目の因子分析の結果、一般教育に特異的な「よい授業」の要因としては、教員の人格因子、授業設計因子、学生の動機因子、教え方の技術因子、集団過程因子が見いだされ、専門教育に特異的な「よい授業」の要因としては、学生の動機因子、学生側集団過程因子、教員の人格因子、教員側集団過程因子が見いだされた。すなわちよい授業とは、講義者の人間的な魅力、学生の自発的な受講動機、授業中の教員と学生とのやりとりや学生の積極的な参加によって特徴づけられる。一般教育では「いかによくしつらえた講義」であるかが、専門教育では「いかによく相互交流のある講義」かがポイントになるとされた。

さらに、学生のタイプからみたよい授業を調べるため、大学生3184名を対象に、学生文化についての30項目、授業評価についての27項目からなる調査を行った。学生文化に関する反応を因子分析した結果、主体的学習の因子と授業順応の因子が見いだされ、その組み合わせにより学生文化を類型化した。タイプIは、主体的学習を志向しながらも、授業にはあまり重きをおかない「探求型」、タイプIIは、主体的学習、授業の両方に消極的な「遊び型」、タイプIIIは、主体的学習には消極的であるが、授業参加には積極的な「順応型」、タイプIVは、主体的学習、授業の両方に積極的な「順応探求型」であった。それらのタイプと授業評価との関連を検討したところ、授業の付加価値、教員の授業に対する取り組み方、学習内容の呈示の仕方などで、タイプIIとタイプIIIの遊び型の学生は高い評価をしていること、国立大学生は、順応型の方が授業内容

が興味とどの程度一致しているかを重視し、私立大学生では、順応型の方が授業の独自性、授業のわかりやすさを評価していることがわかった。

#### 4. 本研究で取り上げる問題

学習習慣・学習態度は学年の進行にともない、あるいは一般教養から専門教育への移行にともないどう変化するのだろうか。

前述のように八並(1989)は、一般教育の「よい授業」の要因としては、授業設計因子、教え方の技術因子を、専門教育の「よい授業」の要因としては、学生側集団過程因子、教員側集団過程因子を見いだした。すなわち、一般教育では「いかによく準備され、わかりやすい講義」であるかが、専門教育では「いかによく相互交流のある講義」かが重要であるとされている。授業評価の相違がその内容の専門性に起因する面も強いと思われるが、学年が進むにつれ学生の授業に対する態度や専攻領域への興味も変化してくるとも考えられる。そこで、本研究の第一の目的として、学年の進行にともなう学習習慣・学習態度の変化を検討することにする。

大学生にみられる病理的な学習意欲の減退状態(ステューデント・アパシー)を、笠原(1986)は「選択的退却症」とよんだが、一般学生にもそうした傾向は程度の差こそあれみとめられるのではないだろうか。学業場面では意欲減退を呈していても、サークル活動やアルバイトの仕事には積極的である学生も多いのではないだろうか。先述のように、学習意欲の程度やサークルへの参加状況を調査した報告はあるものの(上地、1979)、両者の関連を検討してはいない。

また、岩村(1979)は、学業面での不適応の原因の一つとして、サークル活動やアルバイトなど勉学以外への過度の集中をあげている。アルバイトは、積極的モラトリアムの状態にある大学生にとって、将来の就業や社会生活のための実験とも考えられるが、アルバ

イトへの従事の程度が学習習慣・学習態度に関連があるのかどうかは興味深いところである。そこで、第2の目的として、学習習慣・学習態度とサークル活動への参加の程度、アルバイトへの従事の程度との関連を検討する。

#### 5. 女子大学生における学習習慣・学習態度の学年、サークル活動、アルバイト従事との関連の検討

##### 目的

本研究では、まず女子大学生における学習習慣・学習態度はいかなる構造をもつのかを因子分析によって検討する。さらに、それは学年が進むにつれてどう変化していくのか、見いだされた各因子について1年生と3年生の比較を行い検討する。また、アルバイト従事やサークル活動などの勉学以外の活動状況との関連はどうかを調べることにする。以上によって、女子大学における学生像のダイナミックな変容過程を推測することが主な目的である。

##### 方法

###### 1. 質問紙

林・滝本(1981)が作成した、大学生の学習習慣・学習態度を測定するための調査用紙(69項目よりなる、表1)を用いた。専攻、学年、調査日を記入後、「次の69項目について、いつもの自分の考えに一致するかどうかを判断して、それぞれの項目に当てはまるところに○印をつけて下さい」と教示した。回答は、肯定(1. そう思う)から(5. そう思わない)の5段階評定であった。さらに、勉学以外の諸活動として、図書館の利用状況(週0、1~3、4~6回)、サークル活動(入っている、運動系、文化系)、活動状況(0、不定期、週1、2~4、5~7回)、アルバイト(0、週1、2~4、5~7回)の4項目の回答を求めた。

表1 学習習慣・学習態度調査における質問項目

1. 内容を理解せずに、機械的に専門用語、公式、文法などを覚えている
2. もっと自主的に、勉強をしないといけない
3. 試験の受け方が下手なので、試験時間内に自分の考えをはっきりとまとめられない
4. 友人同士、互いに刺激しあって勉強している
5. 授業のあき時間を、勉強に利用する
6. 授業がわからない時、先生に質問するのをためらう
7. 困ったことがあると、自分の勉強がいかげんになる
8. 授業中は、ただノートを取っているだけという感じだ
9. 現在の学生生活は、全体としてうまくいっている
10. 学業に興味をもてないので、あまり専門書を読む気にはなれない
11. 教科書や教材をよく読まない
12. いろいろな空想が、勉学の妨げになる
13. 身体のことを気になり、勉強に集中できない
14. たいして勉強しなくても、卒業に必要な単位はとれる
15. ノートを取るとき、先生の言葉をできるだけ正確に書きとめる
16. 経済、愛情の問題、両親との葛藤など、学校外の問題が、勉強の妨げになる
17. 予習をしたくない
18. 教室では、いつも後ろの席につく
19. 教科書を数ページ読むと、いま読んだことを忘れてしまう
20. 落ちつきのなさ、気分の変化、ゆううつのため、勉強に集中できない
21. 授業に出席さえすれば、必要な単位はとれる
22. 雑誌、読み物、テレビなどに時間をとり、勉強の時間が十分ではない
23. 先生は、学生の問題を理解していないと思う
24. 学業に対する興味を失った
25. 教科書や教材のわからないところを、よく調べておく
26. 学業に困難を感じた時、先生とよく話し合う
27. もっと深く学問がしたい
28. 語学が苦手だ
29. ノートをきちんと整理しておく
30. ある科目と、他の科目の内容を関連づけて学習する
31. 試験の時間が余ったときは、答案を十分見直す
32. 勉強しようとしてから、本当に始めるまでに時間がかかる
33. 試験の準備をするとき、学習したことを順序よく整理する
34. 自分一人で勉強するよりも、仲間と勉強する方がよい
35. ある授業や先生を好きになれないので、そのことが勉強の妨げになる
36. 将来どんな仕事についたらよいか、決めかねている
37. 文章表現が苦手なので、試験やレポートの進捗が、どうしても遅れる
38. ごく短時間しか、勉強に集中できない
39. 希望をもって入学したのに、思ったほど楽しくない
40. クラブ、運動、課外活動、デート、アルバイト、仕事などの活動のため、勉強の時間が十分

とれない

41. 訪問者、雑音、電話などが、勉強の妨げとなる
42. 卒業後の目的をめざして、勉強をしている
43. レポート、宿題などを、ギリギリまで延ばしておく
44. 試験の時間がいつも不足する
45. 試験やレポートの時、何を書けばよいか十分理解できる
46. 単位をとるだけの勉強だ
47. 効果的な学習のしかたがわからない
48. 勉強のしかたが無計画だ
49. 自分がとっているどの授業にも、興味をもとうとしている
50. 多人数の授業が多い
51. 試験になると友人からノートを借りることが多い
52. 勉強しようと思うが、やる気がしない
53. 学業がおもしろくなくても、一生懸命がんばらなくてはならない
54. 勉強について話し合える人が欲しい
55. 大学教育を受けているんだという気持ちが、通学の主な動機だ
56. 興味のない授業の時には、他のことをやったり、空想にふけったりする
57. 授業の要点をつかむことができない
58. 試験前に、ノート整理やコピーをするだけの勉強だ
59. 長い課題を読むとき、私はときどき内容をふり返り、その中の論理について考えてみる
60. やっている課題や、レポート、勉強を手際よく片づけていく
61. 試験というといライラし、困ってしまうので、自分の力が十分発揮できない
62. 成績は、自分の能力をよく反映していると思う
63. 自分にあまり役に立たない授業をとっていると思う
64. 勉強にあてる時間に比べて、その成果は少ないと思う
65. 自分の気分によって、勉強がはかどったり、そうでなかったりする
66. 予定通り勉強ができないので、しばしば中途半端になってしまう
67. クラブ活動を、授業よりも優先する
68. 先生とのつながりが、あまりない
69. 先生の説明がわかりにくい

## 2. 調査対象と手続き

T私立女子大学学生、1年生146名、2年生11名、3年生113名、4年生7名、計280名が調査対象となった。なお、本研究の目的から2、4年生18名と回答不備1名が統計的処理から除外された。調査は、1992年1月に調査者により講義の時間を利用し、クラス毎に集団で行われた。

## 3. 調査データの処理

学習習慣・学習態度調査の資料を、パーソナルコンピュータを用いて、統計解析ソフトにより、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。さらに、得られた各因子得点を基に、1年次学生と3年次学生の学年間比較、サークルの活動状況（サークル活動の有無）、アルバイトの程度（週2回以上か否か）による比較を行った。

結果

1. 学習習慣・学習態度の構造

質問項目に対する反応の因子分析の結果、固有値が2.00以上、累積寄与率がほぼ40%に達し(39.5%)、解釈が容易な8因子解を採択したところ、以下のような8因子が見いだされた。以下に、それぞれの因子に対応する質問項目と因子負荷量を示した(.40以上のもの、なお対応する項目が少ない場合にはそれ以下のものもあげた。かっこ内はそれぞれの因子負荷量である)。

第1因子(寄与率6.21%)

- 20. 落ちつきのなさ、気分の変化、ゆううつのため、勉強に集中できない(.51)
- 22. 雑誌、読み物、テレビなどに時間をとり、勉強の時間が十分ではない(.49)
- 32. 勉強しようとしてから、本当に始めるまでに時間がかかる(.62)
- 38. ごく短時間しか、勉強に集中できない(.61)
- 52. 勉強しようと思うが、やる気がしない(.61)
- 65. 自分の気分によって、勉強がはかどったり、そうでなかったりする(.43)
- 66. 予定通り勉強ができないので、しばしば中途半端になってしまう(.46)

第2因子(寄与率5.07%)

- 58. 試験前に、ノート整理やコピーをするだけの勉強だ(-.68)
- 51. 試験になると友人からノートを借りることが多い(-.65)
- 18. 教室では、いつも後ろの席につく(-.55)
- 29. ノートをきちんと整理しておく(.42)
- 46. 単位をとるだけの勉強だ(-.45)
- 5. 授業のあき時間を、勉強に利用する(.41)

第3因子(寄与率5.18%)

- 13. 身体のことを気になり、勉強に集中できない(.68)
- 16. 経済、愛情の問題、両親との葛藤など、

学校外の問題が、勉強の妨げになる(.58)

- 61. 試験というといライラし、困ってしまうので、自分の力が十分発揮できない(.56)
  - 12. いろいろな空想が、勉学の妨げになる(.52)
  - 41. 訪問者、雑音、電話などが、勉強の妨げとなる(.52)
  - 20. 落ちつきのなさ、気分の変化、ゆううつのため、勉強に集中できない(.48)
- 第4因子(寄与率5.80%)
- 3. 試験の受け方が下手なので、試験時間内に自分の考えをはっきりとまとめられない(-.66)
  - 37. 文章表現が苦手なので、試験やレポートの進行が、どうしても遅れる(-.58)
  - 44. 試験の時間がいつも不足する(-.56)
  - 6. 授業がわからない時、先生に質問するのをためらう(-.52)
  - 7. 困ったことがあると、自分の勉強がいかげんになる(-.51)
  - 45. 試験やレポートの時、何を書けばよいか十分理解できる(.51)
  - 60. やっている課題や、レポート、勉強を手際よく片づけていく(.49)
  - 43. レポート、宿題などを、ギリギリまで延ばしておく(-.45)
  - 48. 勉強のしかたが無計画だ(-.41)
  - 47. 効果的な学習のしかたがわからない(-.40)
- 第5因子(寄与率6.30%)
- 24. 学業に対する興味を失った(-.61)
  - 10. 学業に興味もてないので、あまり専門書を読む気にはなれない(-.58)
  - 63. 自分にあまり役に立たない授業をとっていると思う(-.55)
  - 57. 授業の要点をつかむことができない(-.53)
  - 8. 授業中は、ただノートを取っているだけという感じだ(-.51)
  - 11. 教科書や教材をよく読まない(-.45)
  - 30. ある科目と、他の科目の内容を関連づ



けて学習する (.44)

46. 単位をとるだけの勉強だ (-.44)

39. 希望をもって入学したのに、思ったほど楽しくない (-.43)

69. 先生の説明がわかりにくい (-.42)

第6因子 (寄与率3.35%)

21. 授業に出席さえすれば、必要な単位はとれる (.64)

14. たいして勉強しなくても、卒業に必要な単位はとれる (.60)

68. 先生とのつながりが、あまりない (.44)

第7因子 (寄与率3.44%)

53. 学業がおもしろくなくても、一生懸命がんばらなくてはならない (.54)

33. 試験の準備をするとき、学習したことを順序よく整理する (.43)

49. 自分がとっているどの授業にも、興味をもとうとしている (.42)

25. 教科書や教材のわからないところを、よく調べておく (.39)

第8因子 (寄与率4.14%)

27. もっと深く学問がしたい (-.55)

42. 卒業後の目的をめざして、勉強をしている (-.55)

36. 将来どんな仕事についたらよいか、決めかねている (.48)

28. 語学が苦手だ (.43)

2. もっと自主的に、勉強をしないといけない (-.40)

17. 予習をしたくない (.40)

第1因子に因子負荷量の高い質問項目は、20、22、32、38、52、65、66であり、気分の変化や雑誌、テレビなどによる注意の分散、勉強時間の不十分さを示しており、「学習への集中力欠如の因子」とよぶことにした。第2因子は、試験前だけにノートを準備する、後ろの席につく、単位をとるだけの勉強などの項目に負の負荷をもち、学習意欲や学習への積極的姿勢を反映すると考えられ、「学習意欲の因子」とした(質問項目58、51、18、29、46、5)。第3因子の中で因子負荷量の高い質

問は、13、16、61、12、41、20の6項目であり、身体や学外の問題、空想や落ちつきのなさなどにより勉強が妨げられることを示したものである。すなわち、学習活動に情緒的要因が関わっているので、「情緒性による学習妨害の因子」とした。

第4因子には、試験の受け方、文章表現、時間不足など学習方法や、さらにレポートなどを書く場合の手際の良さなどに負荷量の高い項目がみられ(3、37、44、6、7、45、60、43、48、47)、「学習方法と計画性の因子」とよぶことにした。第5因子は、学業に対する興味(24、10)と授業や学習に対する姿勢(63、57、8、11、30、46)や教師の説明(69)についての項目に負荷量が高く、「学習興味と学習姿勢の因子」とよぶことにする。第6因子については、単位取得の容易さについての項目(21、14)と教員とのつながりについての項目(68)に因子負荷量が高く、「大学教育からの分離因子」と名づけられるのではないかと思われる。

さらに、第7因子の中で因子負荷量の高い項目は53、33、49、25の4項目で、学業がおもしろくなくてもがんばる、どの授業にも興味を持つとうとしている、あるいは試験の準備の学習やわからないことのチェックなど、学習に対する積極的な努力を示す反応といえる。そこで、この因子を「学習への努力の因子」とよぶことにする。第8因子で因子負荷量の高い項目(27、42、36、28、2、17)は、卒業後の目標のための勉強、将来の仕事といった勉強の目的に関するもの、自主的勉強や予習について言及したもので、「学習目標の因子」と名づけた。

## 2. 図書館利用、サークル活動、アルバイトの状況

1週間あたりの図書館利用状況、サークル活動、アルバイト状況のいずれにも、1年生と3年生の間には $\chi^2$ 検定の結果、有意差がみとめられた(図1)。

図書館の利用に関しては、1年生についてみると、図書館を利用しない学生が半数を占

め(51.7%)、3回以下が42.9%、それ以上は8%であった。3年生になると利用者は増加し、3回以下が72.8%、それ以上はほぼ1年生と同じ(8.8%)であるが、利用しない学生も17.5%見られる( $\chi^2=31.725$ 、 $df=2$ 、 $p<.001$ )。

サークル活動については、1年生でサークルに入っていない者が40.8%、運動系37.4%、文化系21.8%である。しかし活動状態は不定期が30.6%、週2~4回が27.2%、それ以上が4.1%である。3年次では、入っていない者は69.3%と倍増しており、運動系(15.8%)と文化系(14.0%)はほぼ同数となっている( $\chi^2=22.625$ 、 $df=2$ 、 $p<.001$ )。活動状況でも、しない者が63.2%と倍増し、不定期19.3%、2~4回13.2%、それ以上3.5%と減少傾向がみられる( $\chi^2=17.513$ 、 $df=3$ 、 $p<.001$ )。

アルバイトの状況については、1年生では、していない37.4%、週1回8.8%、2~4回42.9%、5回以上10.9%となっている。サークル活動とは逆に、3年生になるとアルバイトをしていない学生が28.9%、2~4回が36.8%とやや減少し、5回以上が25.4%と増加している( $\chi^2=9.906$ 、 $df=3$ 、 $p<.05$ )。

次に、次節において、サークル活動とアルバイト状況とが、学習習慣・学習態度とどう関連するかを検討するため、サークル活動の程度を「無し」と「有り」に分け、アルバイ

表2 学年、サークル活動、アルバイト従事による各群の人数

学 年	1 年 生				3 年 生			
	無		有		無		有	
サークル								
アルバイト	少	多	少	多	少	多	少	多
人 数	23	33	44	46	18	54	23	17
小 計	56		90		72		40	

ト状況を「1回以下」と「2回以上」に分けた(表2)。1年生について、 $\chi^2$ 検定によりサークル活動とアルバイト状態には何等関連がみられなかったが、3年生においては有意差がみとめられ、サークル活動の程度とアルバイトに従事する程度とは逆の連関がみられた( $\chi^2=11.704$ 、 $p<.001$ )。すなわち、3年生ではサークル派かアルバイト派に分かれ、何もしないあるいは両方する者は比較的小数であることがわかる。

### 3. 学習習慣・学習態度と学年、サークル活動、アルバイト状況との関連

学習習慣・学習態度とサークル活動への参加の程度・アルバイトに従事している程度との関連を検討する。前述のように、学年毎(1、3年生)にサークル活動(多少)とアルバイト従事(多少)の程度により構成された8群(それぞれサークル少群、アルバイト多群などとよぶことにする)を用いて、因子分

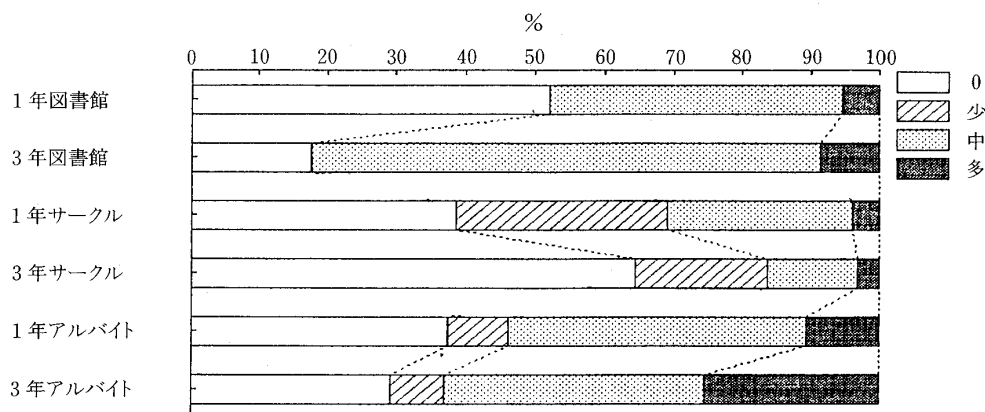


図1 図書館利用、サークル活動、アルバイト従事率の学年間の比較

析の結果得られた各因子の因子得点により、3要因の分散分析を行った。

その結果、図2に示すように第1因子（学習への集中力欠如の因子）では、アルバイト従事の要因が有意であり、アルバイト少群が高い得点を示した（ $F=6.396$ 、 $df=1/250$ 、 $p<.05$ ）。アルバイトを余りしない学生は、学習への集中力が欠如していることを示す。第2因子（学習意欲の因子）については（図3）、学年とサークル活動に交互作用がみられ、1年生ではサークル少群がサークル多群よりも高い得点を示すのに対し、3年生では逆の傾向がみられた（ $F=3.416$ 、 $df=1/250$ 、 $.05<p<.10$ ）。すなわち、1年生でサークルに入っていない学生は学習意欲が高いが、3年生ではサークル活動を行っている学生で学習意欲は高いといえる。

また、第3因子（情緒性による学習妨害の因子）においては（図4）、学年の要因が有意であり、3年生が1年生よりも高い得点である（ $F=6.991$ 、 $df=1/250$ 、 $p<.01$ ）。3年生は1年生に比べ、身体的、対人的、心理的、物理的な種々の事柄によって勉学がより妨害されていることを示している。第4因子（学習方法と計画性の因子）については（図5）、

いずれの要因も有意ではなかった。

さらに図6に示すように、第5因子（学習興味と学習姿勢の因子）については学年間に有意差がみとめられ、3年生は1年生よりも得点が高い（ $F=10.294$ 、 $df=1/250$ 、 $p<.01$ ）。すなわち、3年生は1年生よりも学業に興味をもっており、授業への取り組みも積極的であり、効果的な学習方法をとっている。

第6因子（教育からの分離因子）においては、アルバイト従事の主効果で有意な傾向がみられ、アルバイト多群が高い得点を示す傾向にある（ $F=2.727$ 、 $df=1/250$ 、 $.05<p<.10$ 、図7）。さらに学年とアルバイトの交互作用が有意であり、1年生ではアルバイト少群が高い得点を示すが、3年生では逆にアルバイト多群の高得点が顕著である（ $F=5.001$ 、 $df=1/250$ 、 $p<.05$ ）。これは、アルバイトに長時間費やしている学生は、単位は簡単にとれる、教師とのつながりもないと考えており、3年生で顕著であることを示している。

第7因子（学習への努力の因子）については（図8）、アルバイト従事の主効果が有意であり、アルバイト少群の得点が高い（ $F=4.567$ 、 $df=1/250$ 、 $p<.05$ ）。アルバイトを余

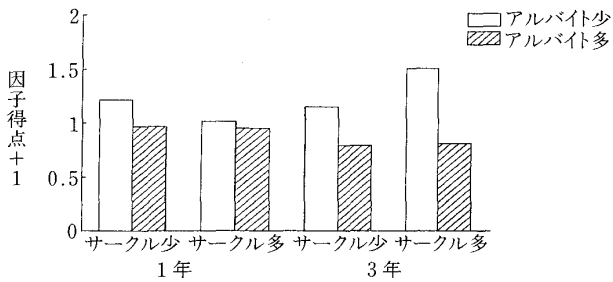


図2 各学年毎の第1因子得点のサークル・アルバイトによる相違

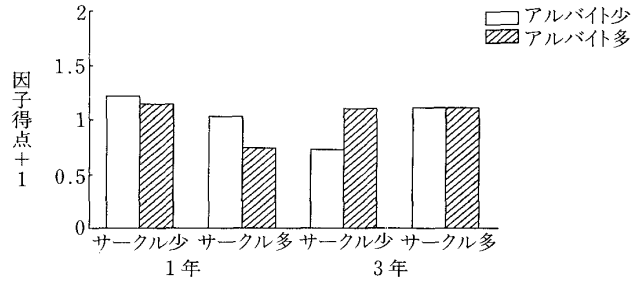


図3 各学年毎の第2因子得点のサークル・アルバイトによる相違

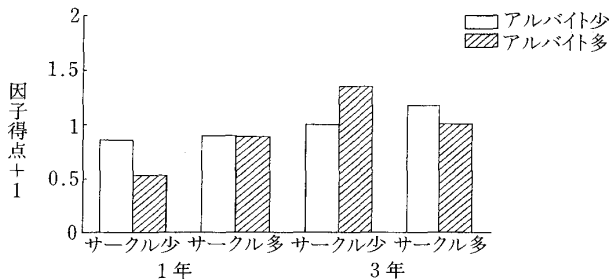


図4 各学年毎の第3因子得点のサークル・アルバイトによる相違

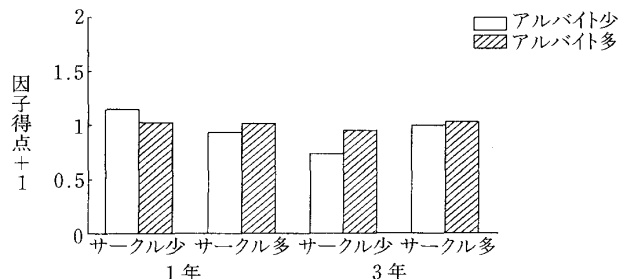


図5 各学年毎の第4因子得点のサークル・アルバイトによる相違

りしない学生は、自分の興味はどうであれ、  
 学業に励もうと努力しているといえる。最後  
 に第8因子（学習目標の因子）については、  
 学年の主効果が有意であり、3年生が1年生

よりも高い得点を示している（ $F=11.102$ 、  
 $df=1/250$ 、 $p<.001$ 、図9）。これは、1年生  
 に比べ3年生のほうが学習目標を見失い、学  
 習意欲が減退している傾向を示している。

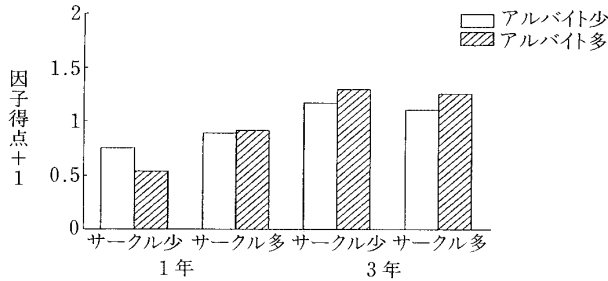


図6 各学年毎の第5因子得点のサークル・アルバイトによる相違

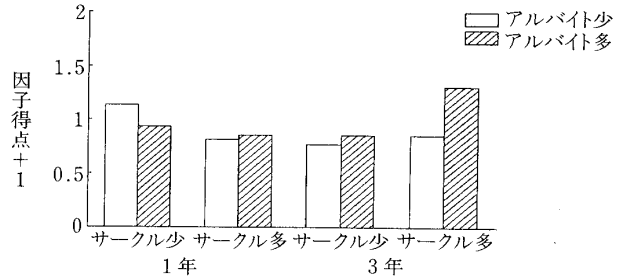


図7 各学年毎の第6因子得点のサークル・アルバイトによる相違

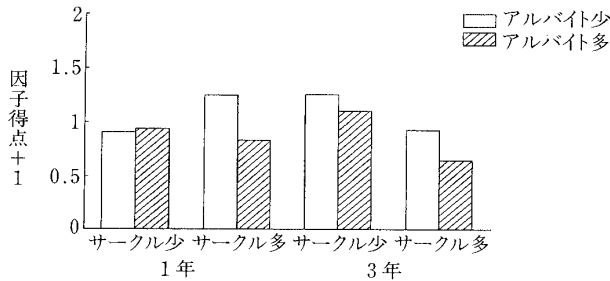


図8 各学年毎の第7因子得点のサークル・アルバイトによる相違

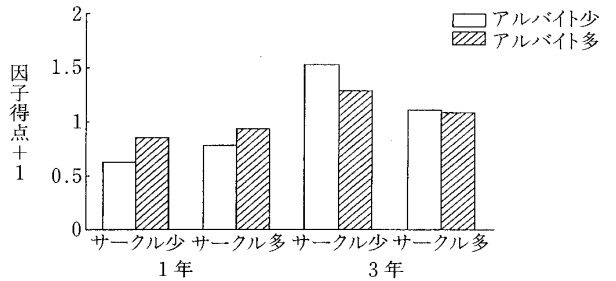


図9 各学年毎の第8因子得点のサークル・アルバイトによる相違

## 考 察

### 1. 女子大学生の学習習慣・学習態度の因子構造

本研究で得られた女子大学生の学習習慣・  
 学習態度の因子構造は8因子からなっており、  
 依拠した林・滝本（1981）の研究において見  
 いだされた因子構造（5因子）と比較しなが  
 ら考察したい。

第1因子は、気分の変化や雑誌、テレビな  
 どのによる注意の分散、勉強時間の不十分さを  
 示す、「学習への集中力欠如の因子」であっ  
 た。第2因子は、試験前だけにノートを準備  
 する、後ろの席につく、単位をとるだけの勉  
 強などの項目に負の負荷をもち、学習意欲や  
 学習への積極的姿勢を反映すると考えられ、  
 「学習意欲の因子」とした。また、第3因子  
 は、身体や学外の問題、空想や落ちつきのな  
 さなどの情緒的要因により勉強が妨げられる、  
 「情緒性による学習妨害の因子」となった。  
 第4因子は、試験の受け方、文章表現、学習

時間の不足など学習方法や、レポートなどを  
 書く場合の手際の良さなどの、「学習方法と計  
 画性の因子」であった。さらに、第5因子は、  
 学業に対する興味、授業や学習に対する姿勢  
 や教師の説明についてで、「学習興味と学習姿  
 勢の因子」が見いだされた。

これらのうち、第2因子から第5因子まで  
 は、林・滝本（1981）の見いだした4因子と  
 ほぼ対応している。彼らが女子学生について  
 見いだした「学習の手際のよさの因子」は、  
 今回の分析では第4因子「学習方法と計画性  
 の因子」に含まれた。なお、本研究の第1因  
 子「学習への集中力欠如の因子」と第3因子  
 「情緒性による学習妨害の因子」は、項目内  
 容から林・滝本（1981）の「情緒性の因子」  
 と対応していると思われる。

第6因子には、単位取得の容易さ、教員と  
 のつながりのなさの項目が含まれ、学業から  
 一步退いた態度を示しており、「大学教育から  
 の分離因子」と名づけた。第7因子は、学業

がおもしろくなくてもがんばる、どの授業にも興味を持とうとしている、試験勉強をする、わからないことをチェックするなど、学習に対する積極的な努力を示しており、「学習への努力の因子」とした。最後の第8因子は、卒業後の目標のための勉強、将来の仕事といった勉学の目的に関するもの、自主的勉学や予習について言及したもので、「学習目標の因子」と名づけた。以上の3因子は、本研究独自に見いだされたもので、林・滝本(1981)の研究から10年を経たことによる、世代の変化を反映しているものか、T女子大学の学生に特異的反応なのかは不明である。

## 2. 学業以外の諸活動の状況

本研究では、学業以外の諸活動と学習習慣・学習態度との関連を検討するため、図書館の利用状況、サークル活動、アルバイトへの従事についての調査も行った。その結果、図書館の利用については、1年生では、利用する学生が半数を占め、3年生になると、8割以上が週に一度は利用している。

また、サークル活動については、1年生で参加しているものは6割であるが、不定期な活動が多く、週2回以上の活動をしている学生は3割である。3年生では、サークルに入っていない者は7割と倍増しており、定期的活動は2割に低下する。一方、アルバイトへの従事は、サークル活動と全く逆で、1年生では週1回以下が半数を占め、5回以上は1割程度であるが、3年生になるとアルバイトをしていない学生が3割弱に減少し、5回以上が25%と増加する。

すなわち、学年が進行するにつれ、学業以外における学生のエネルギー配分は、サークル活動からアルバイトへと転換していくようである。しかし、さらにこの点を分析してみると、1年生ではサークル活動とアルバイト従事にはなんら関連がみられなかったが、3年生では、両方に力を入れる学生と何もしない学生は少なく、サークル派かアルバイト派に分かれていくことがわかった。

## 3. 学習習慣・学習態度と学年、サークル活動、アルバイト従事との関連

各因子毎に、学年、サークル活動、アルバイト従事を要因として、因子得点を用いて分散分析を行った。学年要因の主効果が有意なもの、8因子のうち第3、5、8因子であり、アルバイト要因の主効果は、第1、6、7因子にみとめられ、サークル要因は第2因子の交互作用のみにみられた。

学年間に差がみられたものは、まず「情緒性による学習妨害の因子」(3)であり、いずれも3年生が1年生よりも高い得点を示している。すなわち、3年生は1年生に比べ、身体的、対人的、心理的、物理的な種々の事柄によって勉学がより妨害されている。さらに、「学習興味と学習姿勢の因子」(5)の学年間の有意差から、3年生は1年生よりも学業に興味をもっており、授業への取り組みも積極的であり、効果的な学習方法を取っているといえよう。ところが、「学習目標(欠如)の因子」(8)への学年の主効果から、3年生がより高い得点を示しており、1年生に比べ3年生のほうが学習目標を見失い、学習意欲が減退している傾向もみられる。

すなわち、学年が進み専門教育に入るにつれ、学業に対して興味をもち積極的に取り組む場合、身体的、社会的、物理的な種々の情緒的な妨害要因により学習が妨げられている場合、将来への目標を見失い学習意欲を減退していく場合というように、さまざまなタイプに多様化していくと考えられる。

アルバイト要因の効果は、まず「学習への集中力欠如の因子」(1)でみられ、アルバイトをあまりしない学生は、学習への集中力が欠如していることがみとめられた。逆にアルバイトに従事している学生は、短時間に集中して学業を行っていることを示唆している。これは、「教育からの分離因子」(6)への効果からも示唆される。1年生と異なり、3年生でアルバイトに長時間従事している学生は、「単位は簡単にとれる、教師とのつながりもない」と考えていることを示す。また、一方、

「学習への努力の因子」（7）におけるアルバイト従事の主効果から、アルバイトをあまりしない学生は、自分の興味はどうであれ、学業に励もうと努力していると考えられる。

サークル要因の効果は、「学習意欲の因子」（2）において学年との交互作用でみとめられ、1年生でサークルに入っていない学生は学習意欲が高いが、3年生ではサークル活動を行っている学生のほうが学習意欲は高いといえる。

以上の結果をまとめると、学年が進むにつれ、学生はそれぞれ重点をおく活動を決めていくようである。すなわち1年次には、サークル活動、アルバイト従事など一通り行い、学習意欲もある程度もっているが、3年ともなると、学業重視型、多数を占めるアルバイト重視型、サークル重視型に分かれていく。アルバイトに従事する学生は、簡単に単位が取れると考え、要領がよく、短時間しか学業に力を入れなくなっている。一方、サークル重視型は、ある程度高い学習意欲を維持しているといえよう。

#### 4. 今後の問題

本研究で見いだされた、学年進行にともなう学習習慣・学習態度の変化、アルバイトへの従事、サークル活動との関連は、男子学生ではどうか、また他大学の学生にも同様に見いだされるであろうか。林・滝本（1981）、林（1982）によると、因子構造には若干の性差が見いだされており、学生による授業評価についての報告からは（八並、1989）、国立大学生と私立大学生は授業に対してやや異なる評価基準をもっていると考えられることから、本研究での知見の一般化は早急であろう。

しかし、大学生の学習習慣・学習態度が、サークル活動や学外でのアルバイト従事と大きな関連があるという事実は、学業面だけに限らず、より広い視点からの学生の把握が必要なことを示している。さらに、他の特性との関連（外向性と神経症傾向、林、1981、1982；テスト不安、林、1984）も検討されているが、社会的スキルや社会的サポートとの関連にも

興味をもたれるところである。

その一方で、学生の学業への適応を促進するためには、より構造化された質問紙による検討も必要であろう。学習習慣・学習態度の下位領域の検討とともに（林、1982；坂元、1988）、動機づけや学習、記憶など、情報処理システムの働きについての最近の知見を援用した研究が有効と思われる。そうした研究例として、Banduraの社会的学習理論の流れをくむ自己調節学習の研究（Zimmerman, B. J., 1989）、Weinerの原因帰属理論を大学の教室場面に適用しているPerry, R. P & Magnusson（1989）、スタディスキルを情報処理システムモデルで解明しようとするMoreno, V., & Di Vesta, F. J.（1991）などをあげることができよう。

さらに、学習習慣・学習態度などの学習者要因は、教授者要因、学習内容要因との相互作用としての教授＝学習過程の一部をなしているということを強調しなくてはならない。これまで見てきたように、講義の内容や程度、教え方や教師とのコミュニケーションなどは、学習意欲に大きく影響するのである。

最後に、学業不適応や学習意欲の減退におちいつている学生への対処について、若干付言したい。従来の学生相談は、不本意入学による学業への不適応は別として、情緒的問題、ボーダーライン、アパシー、対人関係、進路の問題についての相談が中心であった（松原、1983）。しかし、それまでの受験のための勉強から解き放たれた新入生たちが、大学教育という自己調節学習の場におかれたとき、最も必要なものは、スタディスキルを身につけることではないだろうか。この点から、大学入学後数カ月における教育的ガイダンスの試み（林、1981、1982a、b；扇谷、1988）、認知カウンセリングの実践（市川、1992など）は注目に値する。

付記）本研究を行うにあたり、貴重な文献資料を頂きました、白梅女子短期大学教授林潔先生に厚く感謝致します。

## 引用文献

- 安藤延男 (1989) スチューデント・アパシー、山崎久美子 (編) 現代のエスプリ、大学生のメンタルヘルス、至文堂
- Brown, W. F. (1965) *Study skills surveys*. San Marcos, Texas: Effective Study Materials.
- Brown, W. F. & Holtzman, W. H. (1972) *A Guide to College Survival*. Prentice Hall, New Jersey.
- 林 潔 (1981) 大学生の学習技術、新書館
- 林 潔 (1982a) スタディスキルと大学カウンセリング、新書館
- 林 潔 (1982b) 学生のStudy Skillsについて 相談学研究、14、10-21.
- 林 潔 (1983) 学生のStudy Skillsについて(2) 相談学研究、15、66-74.
- 林 潔 (1984) 学生のStudy Skillsについて(3) 相談学研究、16、71-77.
- 林 潔・滝本孝雄 (1981) 大学生の学習習慣、学習態度の構造と性格傾向との対応 相談学研究、13、70-78.
- 飯島婦佐子・伊藤 彩・川口祐貴子 (1992) 大学新入生の適応に関する縦断的研究 (1、2、3) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集、118、119、120.
- 市川伸一 (編) (1992) 認知カウンセリングのケース研究 第4集—東京女子大学1991年度における学生の報告から— 教育心理学フォーラム・レポート、FR-92-001、日本教育心理学会
- 石井完一郎・笠原 嘉 (1981) 現代のエスプリ、スチューデント・アパシー、至文堂
- 岩村 聡 (1979) 学生の勉学・進路・留年・休退学 藤土圭三 (編) 現代学生 of 精神衛生、北大路書房
- 片岡徳雄・喜多村和之 (編) (1989) 大学授業の研究、玉川大学出版部
- 笠原 嘉他 (編) (1981) キャンパスの症候群—現代学生の不安と葛藤、弘文堂
- 笠原 嘉 (1984) アパシー・シンドローム：高学歴社会の青年心理、岩波書店
- 喜多村和之 (編) (1988) 大学教育とは何か、玉川大学出版部
- 松原達哉 (1979) 大学生の留年の研究 (I) 筑波大学心理学研究、1、26-34.
- 松原達哉 (1980) 大学生の留年の研究 (II) 筑波大学心理学研究、2、57-64.
- 松原達哉 (1983) 日本の大学における学生相談活動 筑波大学心理学研究、5、95-120.
- 宮本邦雄 (1992a) 女子大学生における進学志望動機の研究 東海女子大学紀要、11、251-257.
- 宮本邦雄 (1992b) 大学入学後3ヶ月時における1年次学生の大学生生活に関する意識調査 未発表資料
- Moreno, V., & Di Vesta, F. J. (1991) Cross-cultural comparisons of study habits. *Journal of Educational Psychology*, 83, 231-239.
- 扇谷 尚 (1988) 大学一年生プログラムの課題、喜多村和之 (編) 大学教育とは何か、玉川大学出版部
- Perry, R. P. & Magnusson, J. L. (1989) Causal attributions and perceived performance: Consequences of college students' achievement and perceived control in different instrumental conditions. *Journal of Educational Psychology*, 81, 164-172.
- 島田博司 (1989) 授業中の私語、片岡徳雄・喜多村和之 (編)、大学授業の研究、玉川大学出版部
- 土川隆史・丸井文男 (1978) 大学生の留年の実態とその要因の分析、名古屋大学学生相談
- 上地安昭 (1979) 学生の意欲減退、藤土圭三 (編) 現代学生 of 精神衛生、北大路書房
- ウォルターズ (1975) スチューデント・アパシー、石井完一郎他監訳、学生の情緒問題、文光堂
- Walters, P. A. Jr. (1961) Student apathy. Blaine, G. B. Jr. & McArthur, C. C. (Eds.) *Emotional Problems of the Student*. New York: Appleton-Century Crofts.
- Zimmerman, B. J. (1989) A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, 329-339.